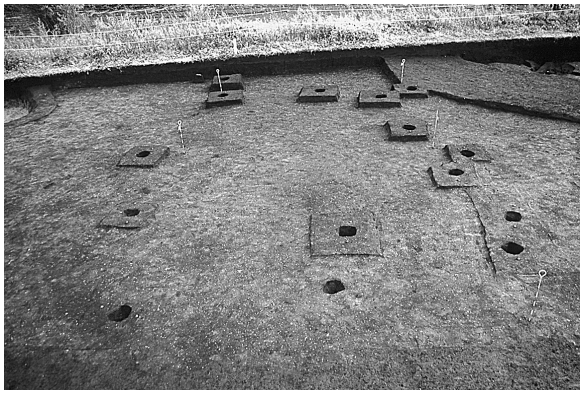
第５号掘立柱建物跡　確認　東→

第５号掘立柱建物跡　完掘　南→

第６号掘立柱建物跡　完掘　北→

第６号掘立柱建物跡　確認　北→

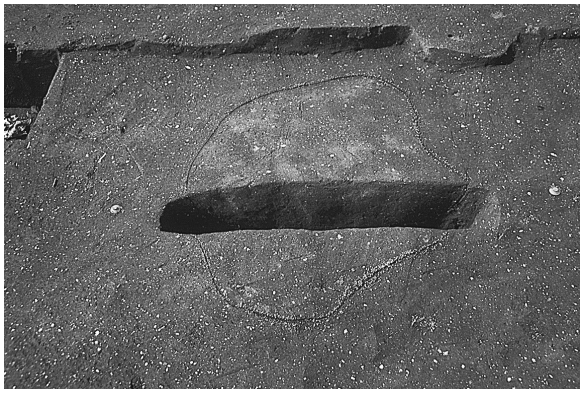
第７号掘立柱建物跡　完掘　東→


第７号掘立柱建物跡　完掘　北→

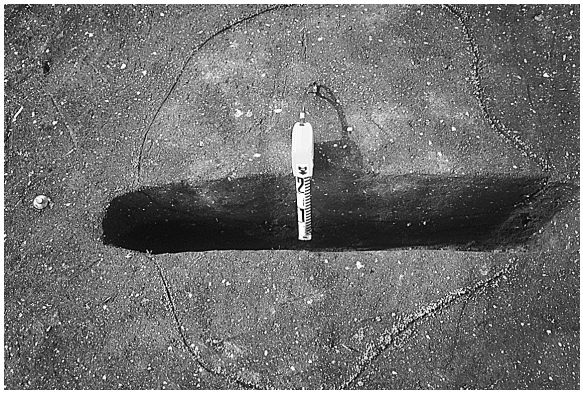
第１号焼土遺構　確認　北東→

第１号焼土遺構　土層　東→

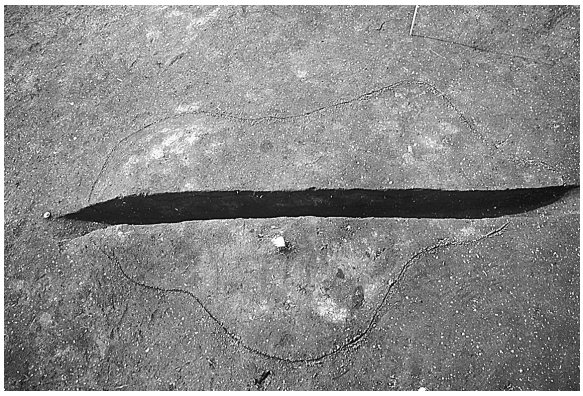
図版55



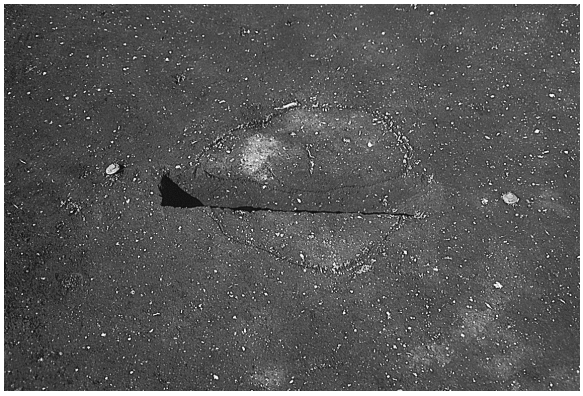
第２号焼土遺構　東→



第２号焼土遺構　土層　東→



第３号焼土遺構　東→



第４号焼土遺構　南東→

第１号道路跡　確認　南→

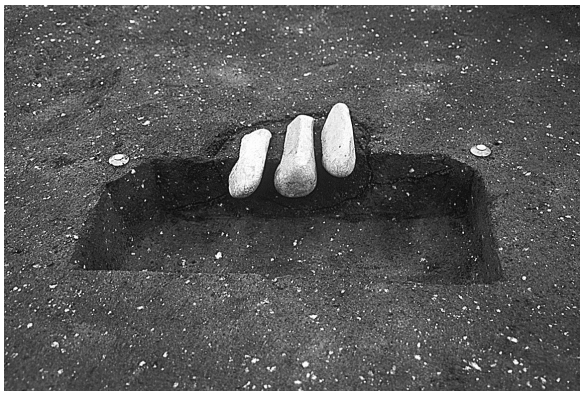
第１号道路跡　土層　北→

第１号集石遺構　下層確認　東→

図版56

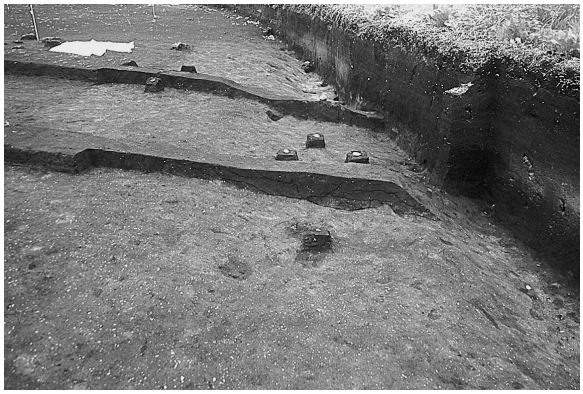
第１号集石遺構　下層確認　南→

第１号石器埋納遺構　確認　北→



第１号石器埋納遺構　土層　西→

第１号石器埋納遺構　土層アップ

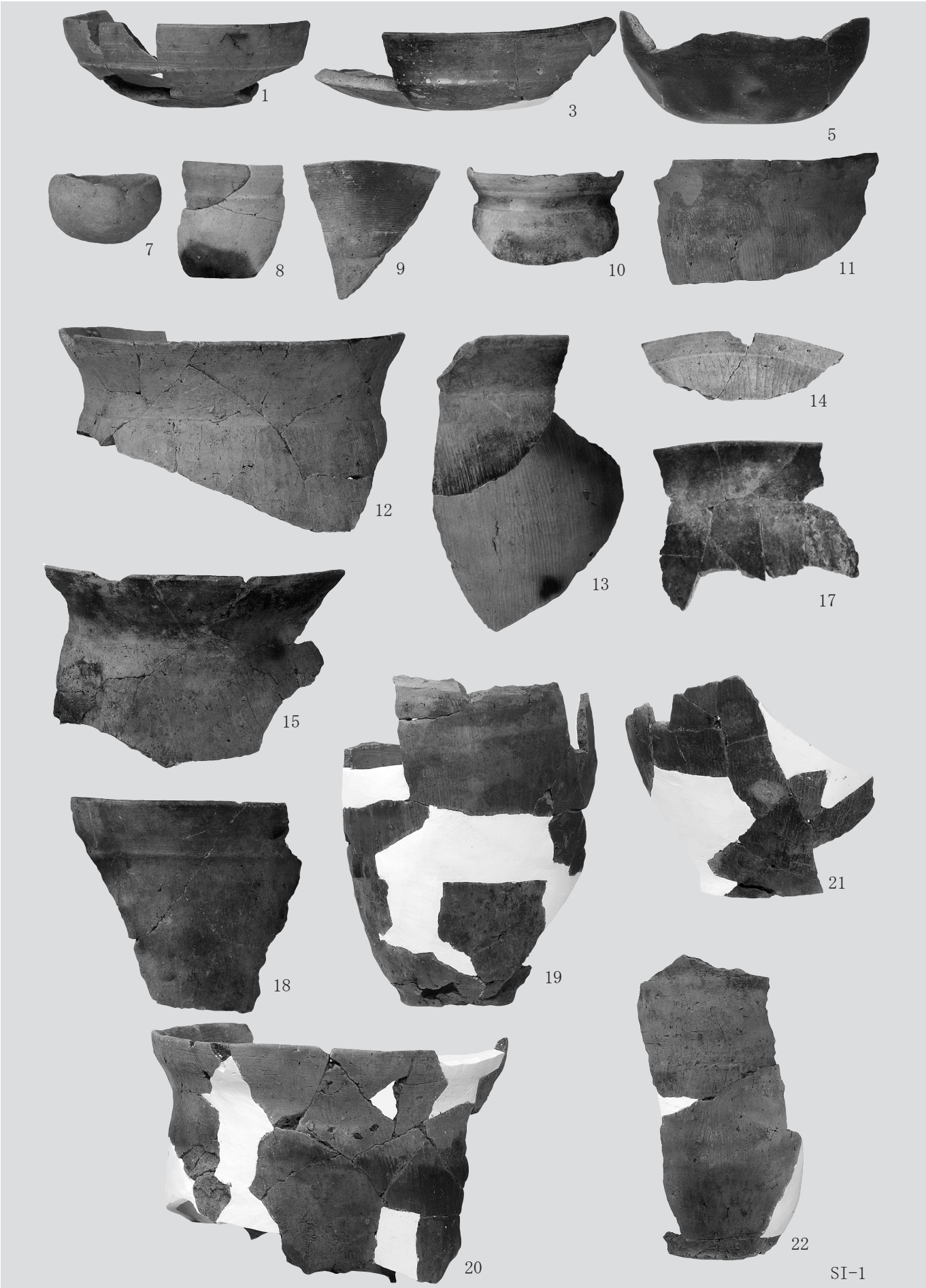


第２号道路跡　土層　南→

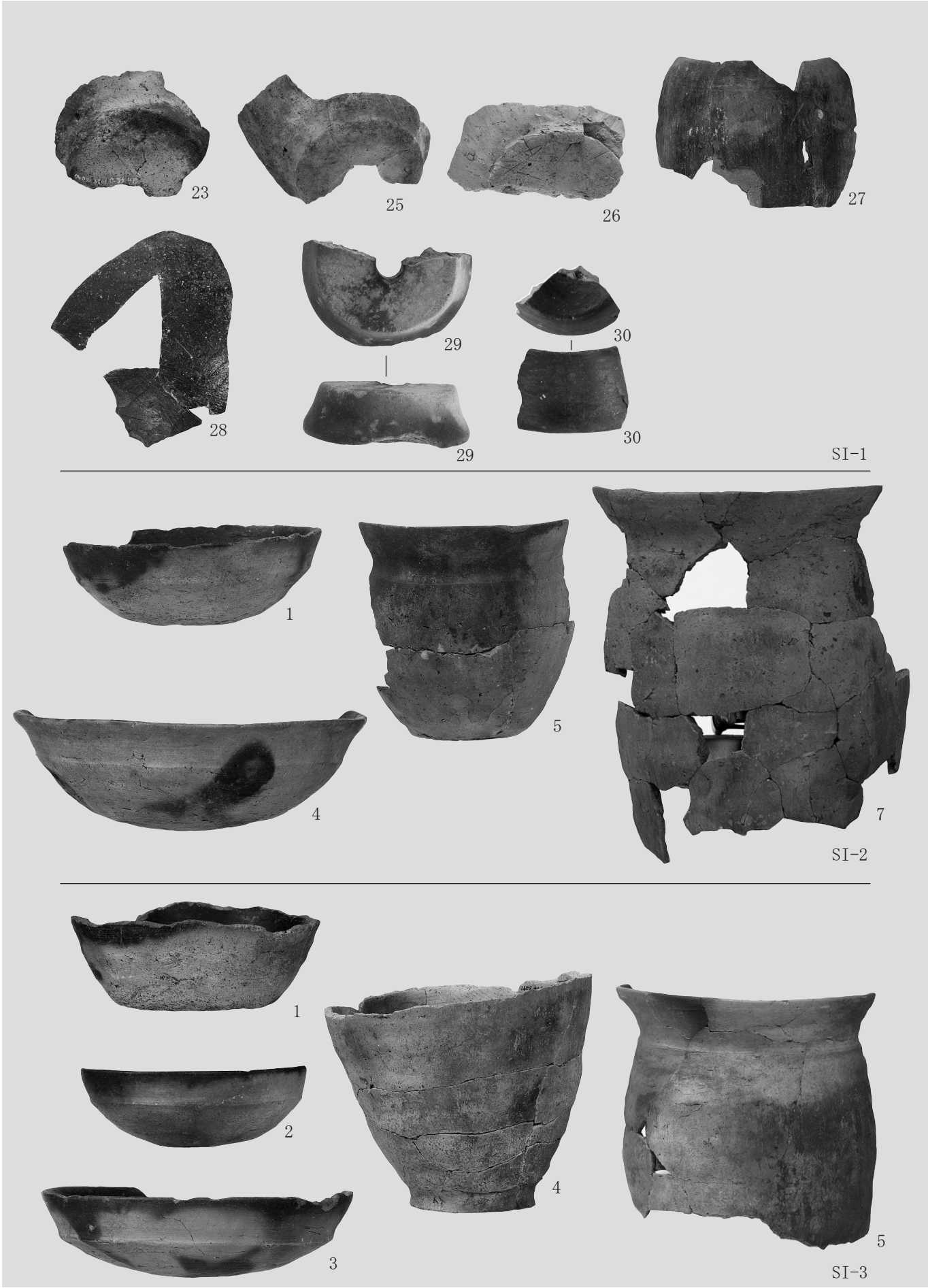
図版57

遺跡周辺の航空写真

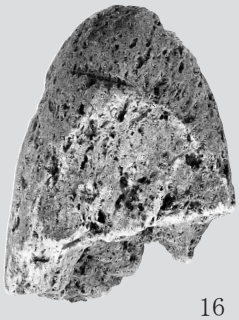
図版58



図版59

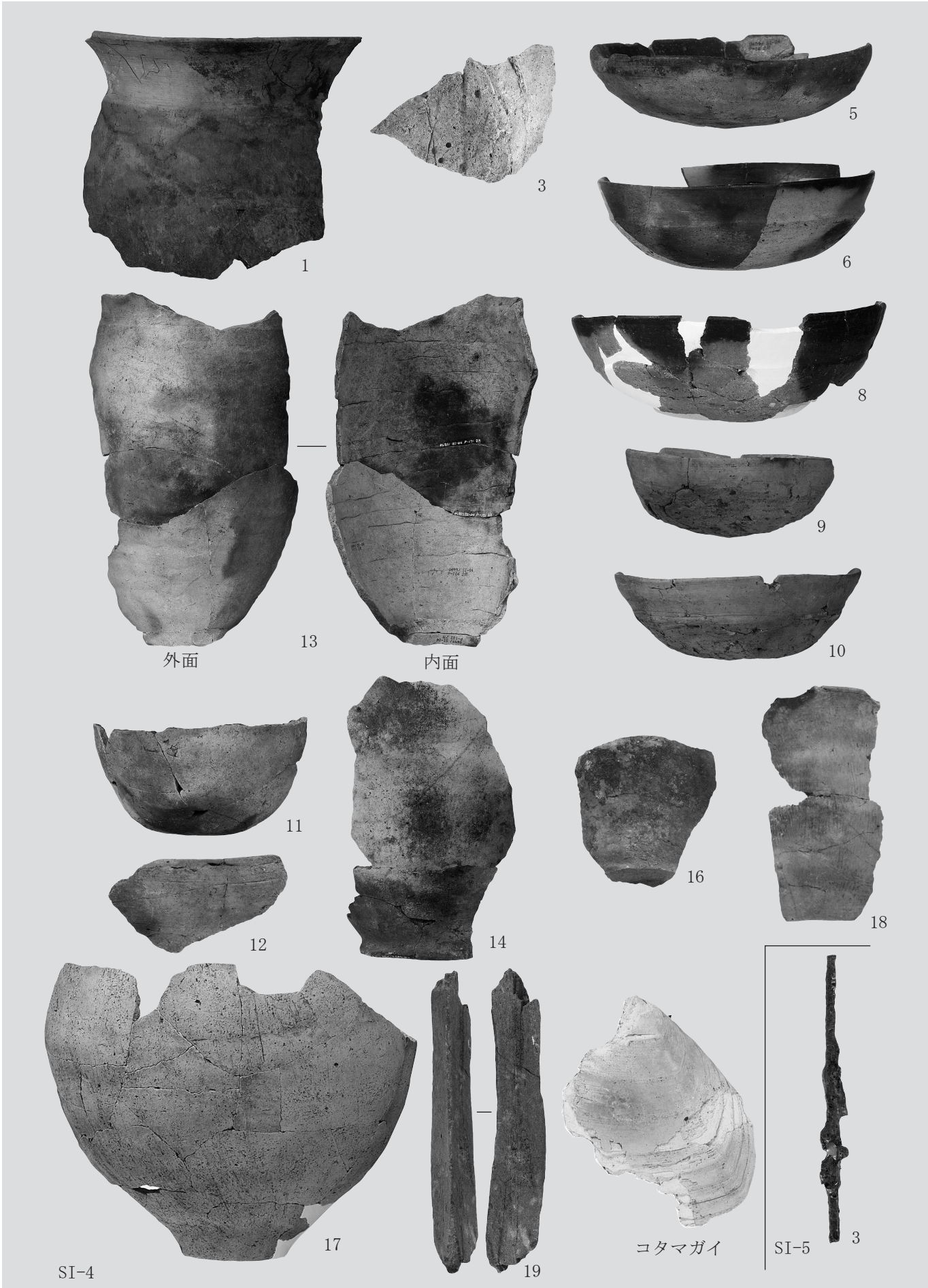


図版60



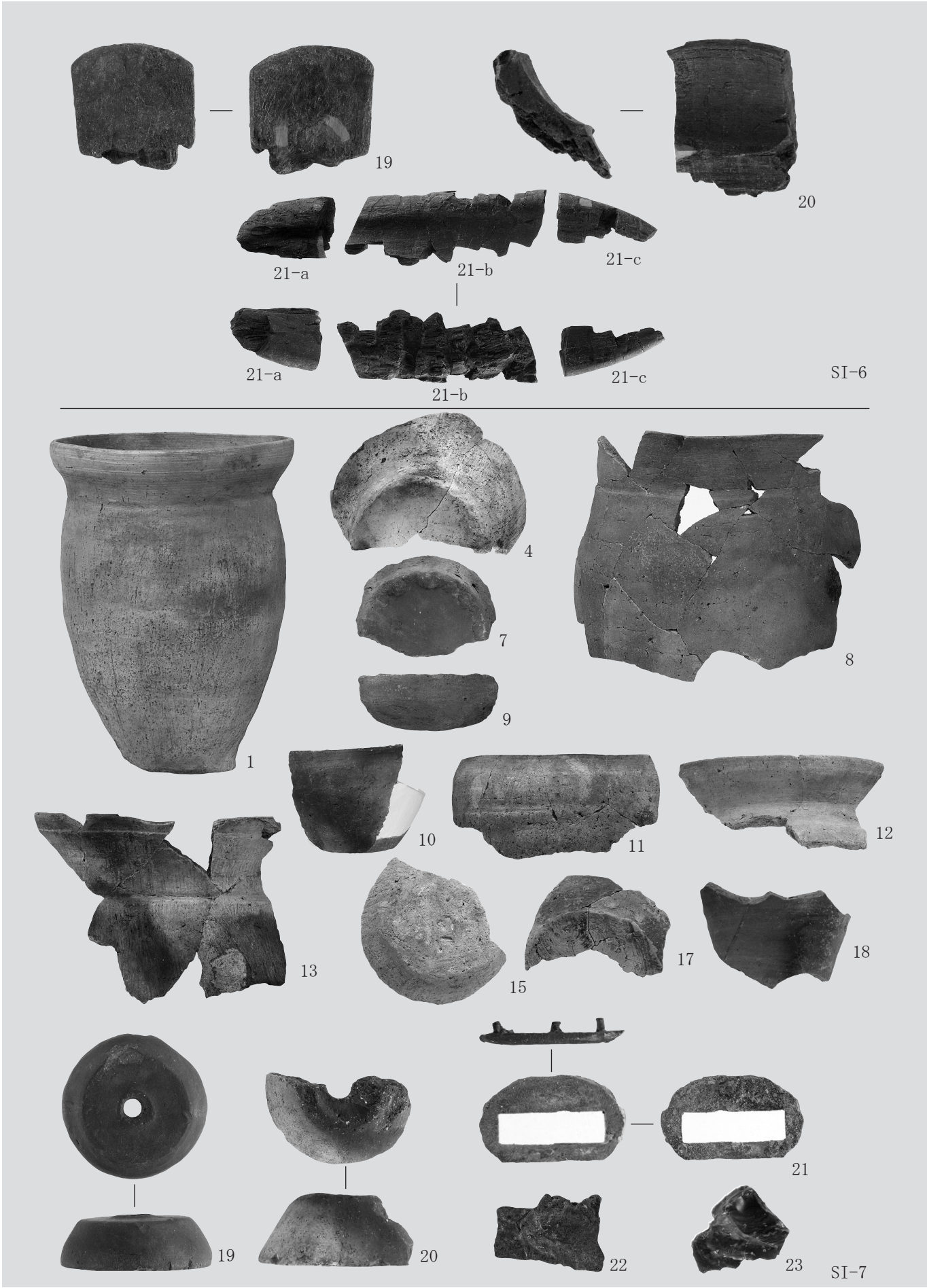
SI-3

図版61

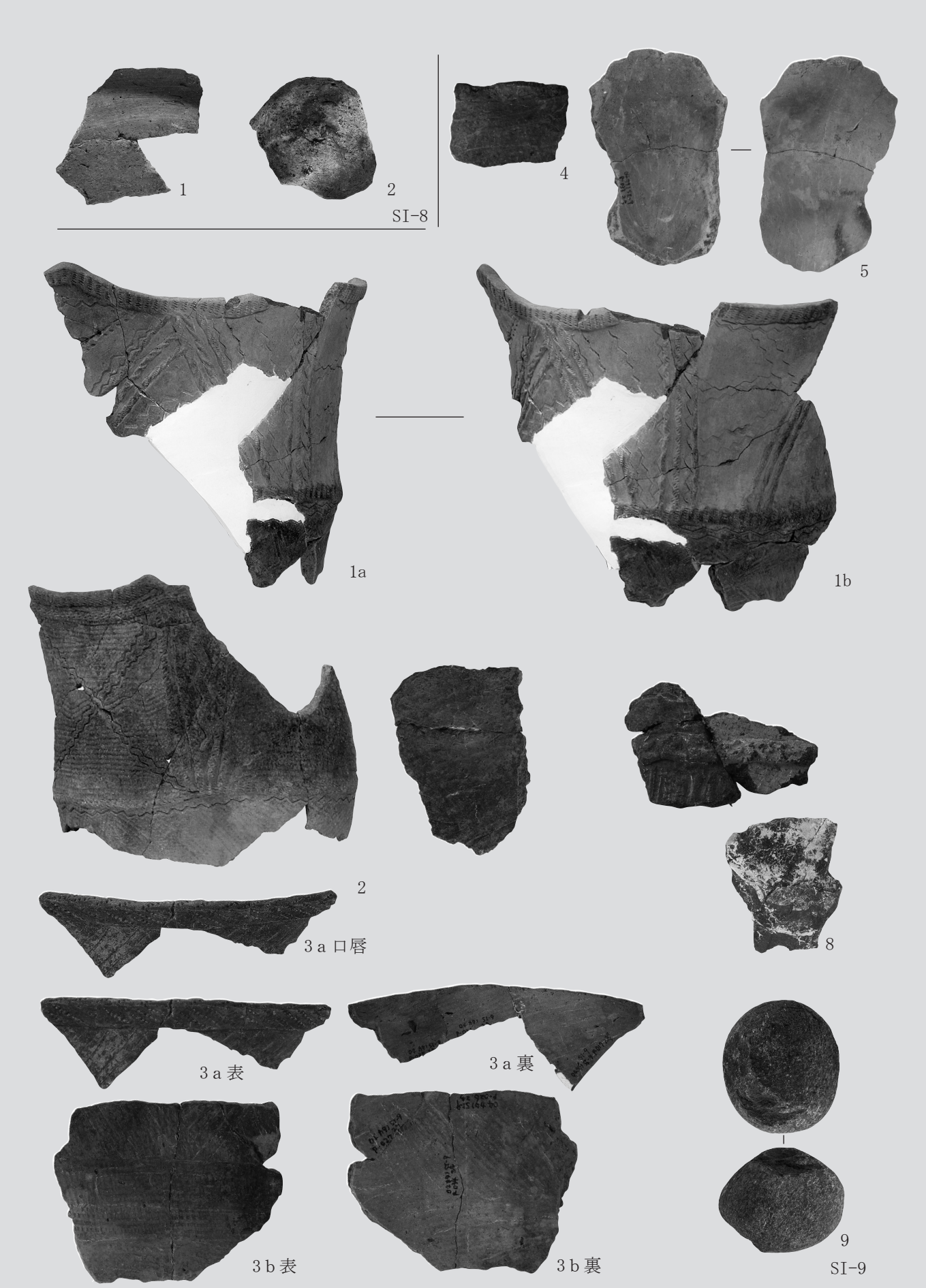


図版62

図版63


19
20
21-a
21-b
21-c
21-a
21-b
21-c
SI-6
1
4
7
8
9
10
11
12
13
15
17
18
19
20
21
22
23
SI-7

図版64

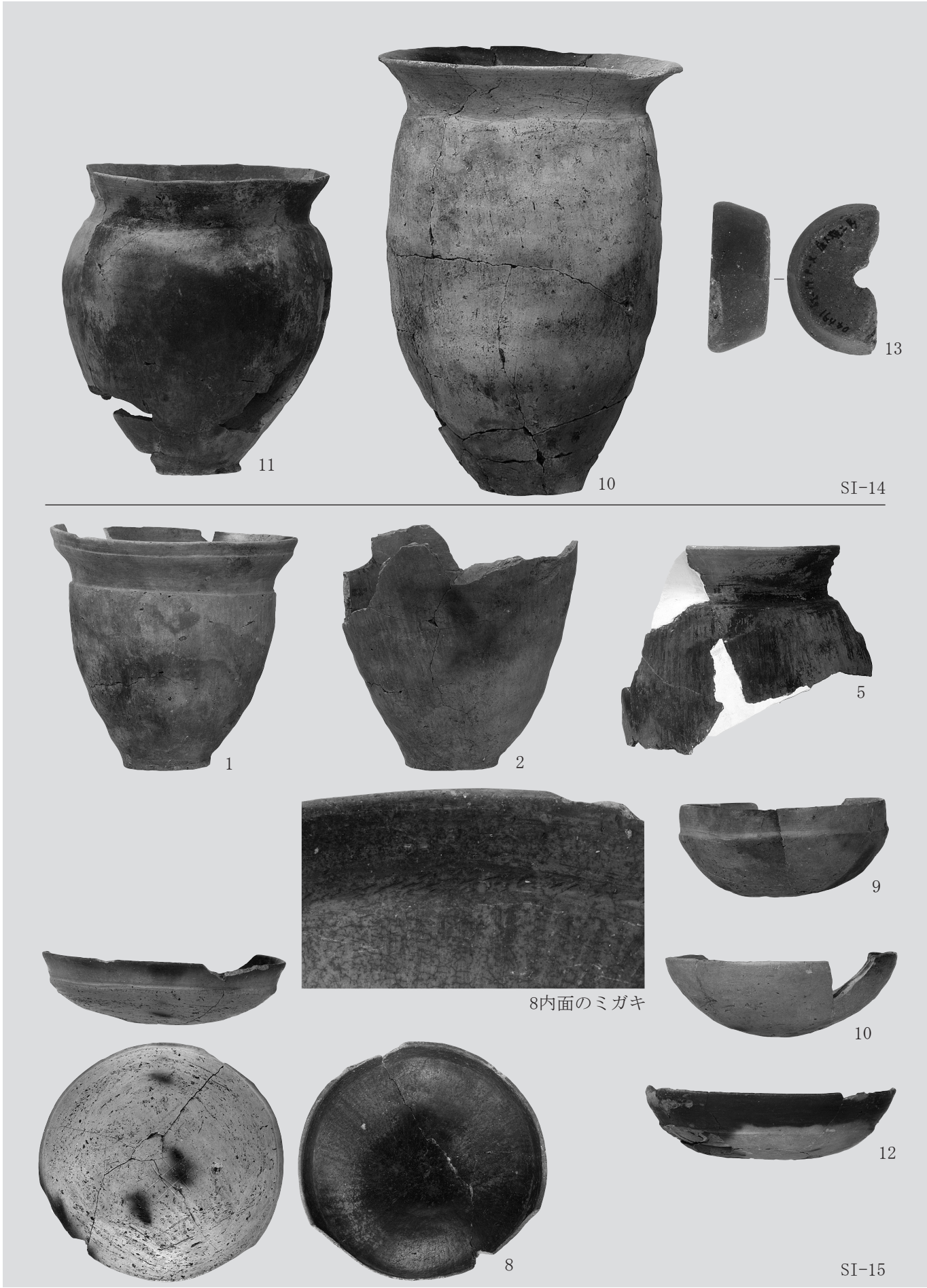


図版65

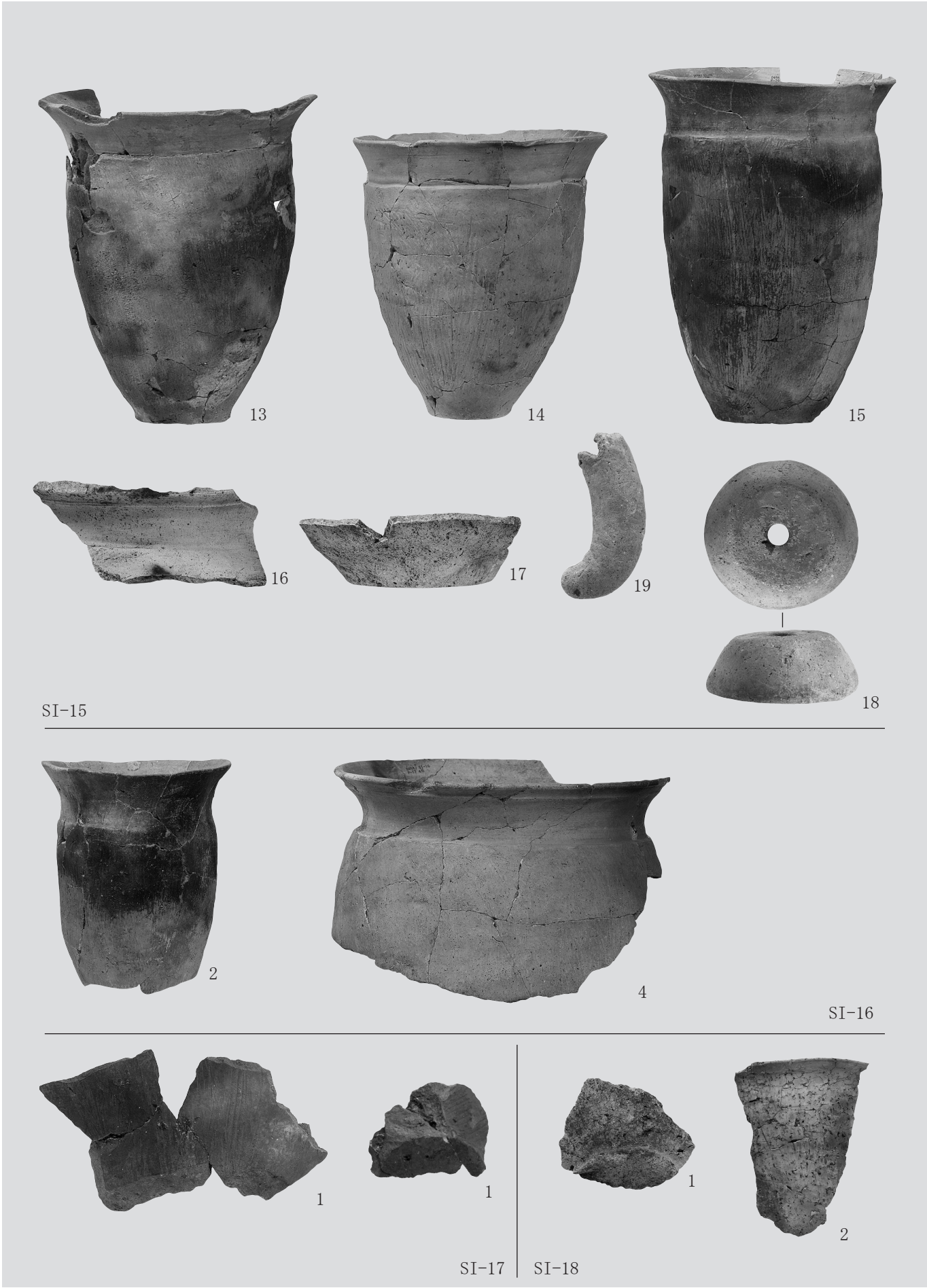
図版66

図版67

図版68



図版69



図版70

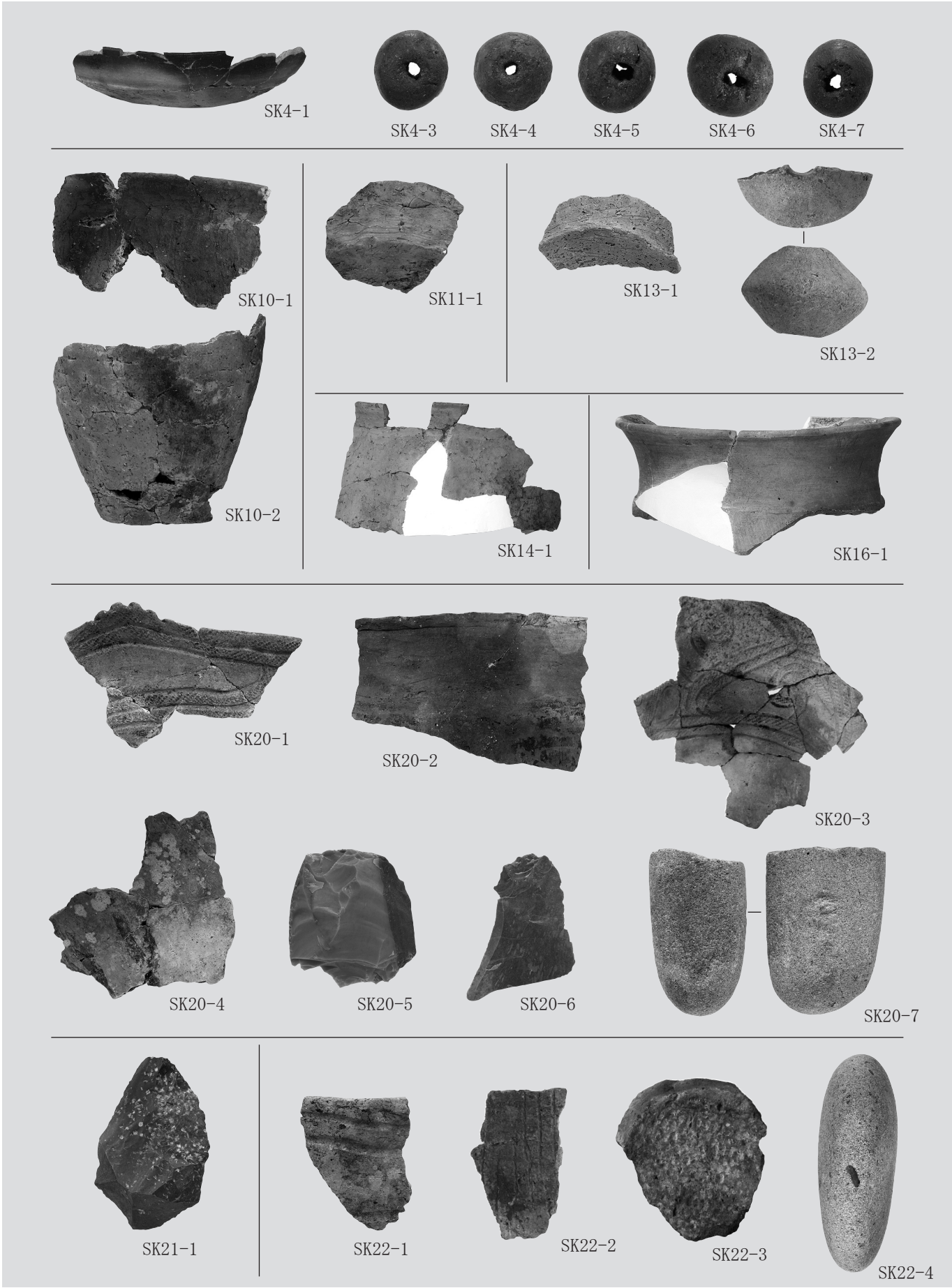
SI-19

SI-20

SI-22

SI-23

図版71


SK4-1
SK4-3
SK4-4
SK4-5
SK4-6
SK4-7
SK10-1
SK10-2
SK11-1
SK13-1
SK13-2
SK14-1
SK16-1
SK20-1
SK20-2
SK20-3
SK20-4
SK20-5
SK20-6
SK20-7
SK21-1
SK22-1
SK22-2
SK22-3
SK22-4

図版72

SK30-1

SK30-2

SK31-1

SK31-2

SK31-3

SK34

SK41-1

SK42-1

SK43-1

SK43-2

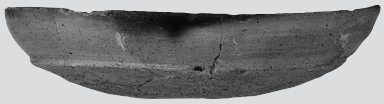
SK44-1

SK45-1

SK45-2

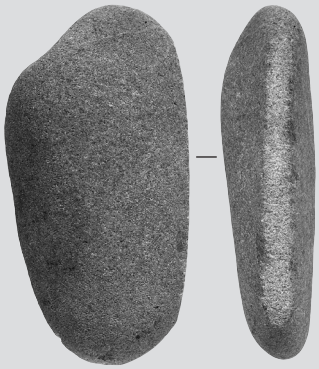
SK45-3

SK45-3


SK50-1

1

SN-4

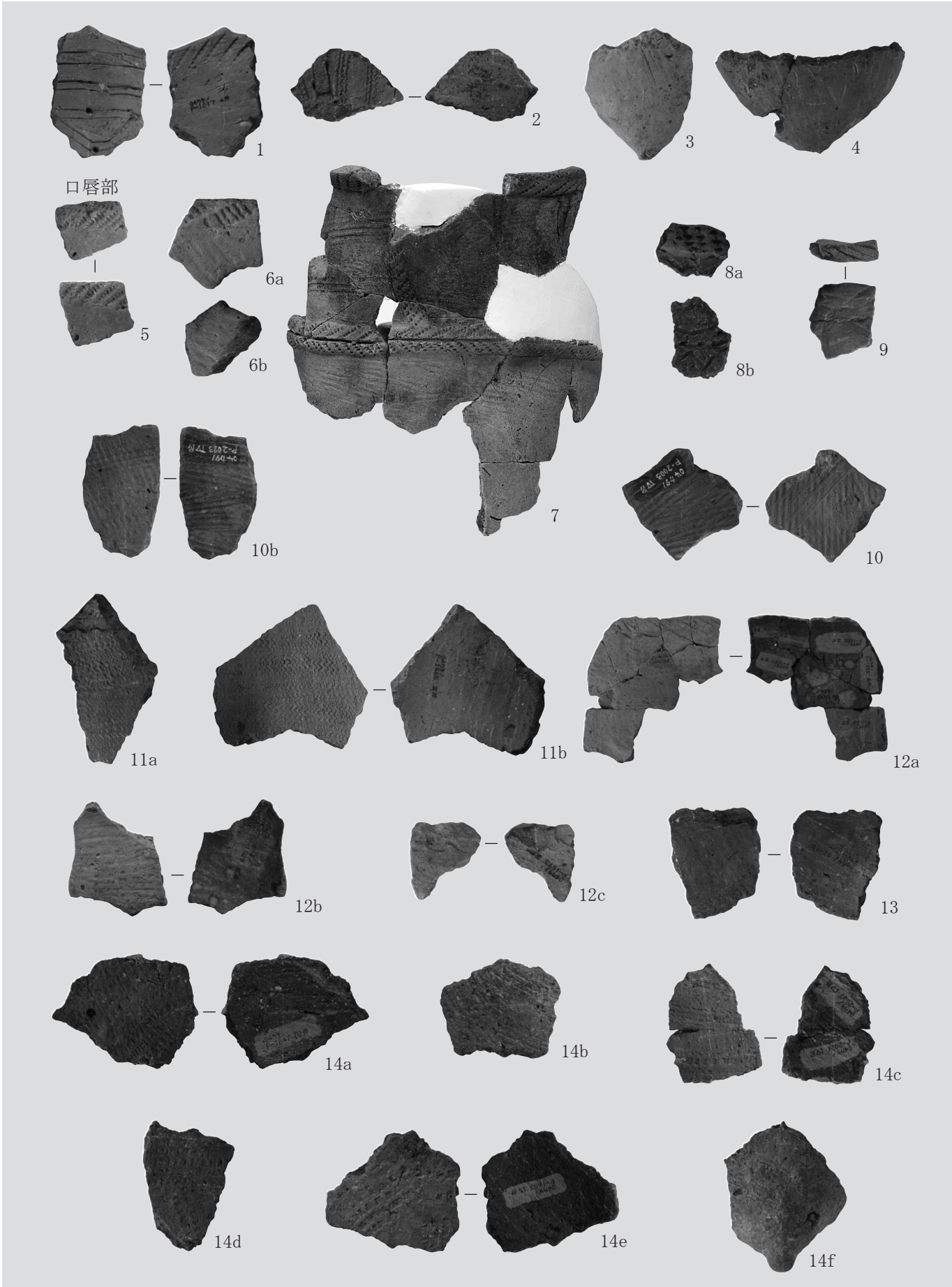

1

2

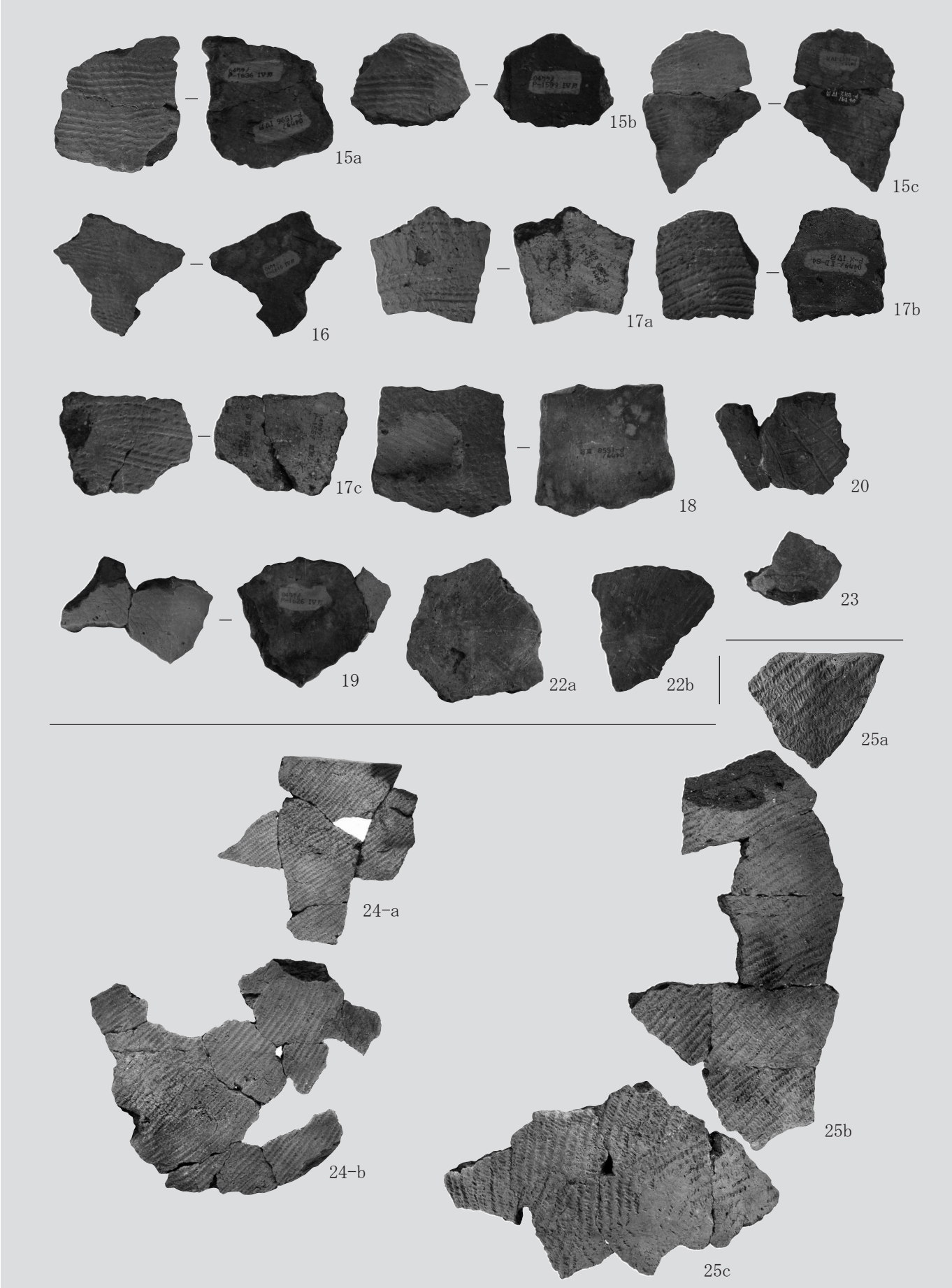
3

SX-3

図版73


口唇部
1
2
3
4
5
6a
6b
7
8a
8b
9
10
10b
11a
11b
12a
12b
12c
13
14a
14b
14c
14d
14e
14f

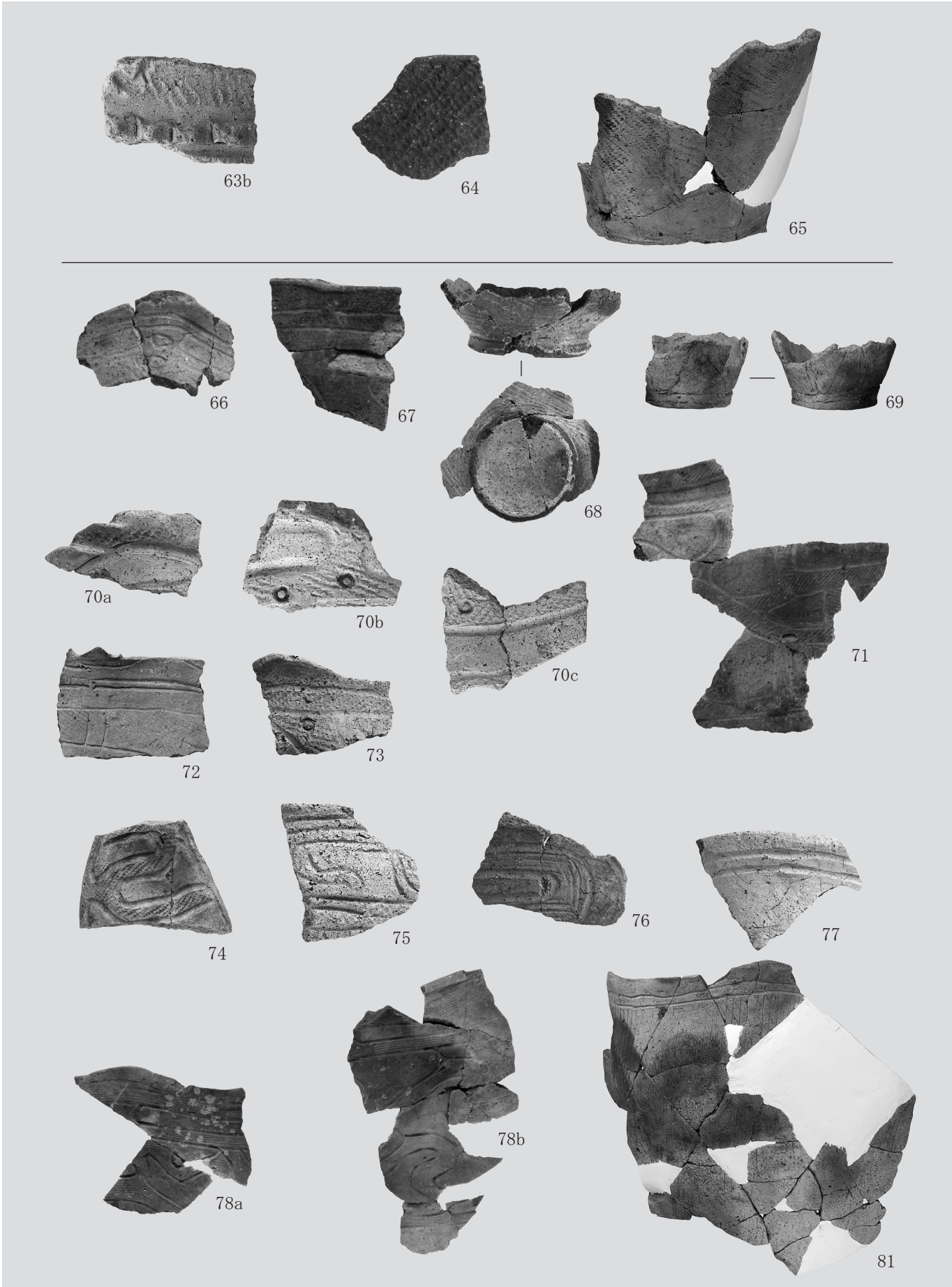
図版74



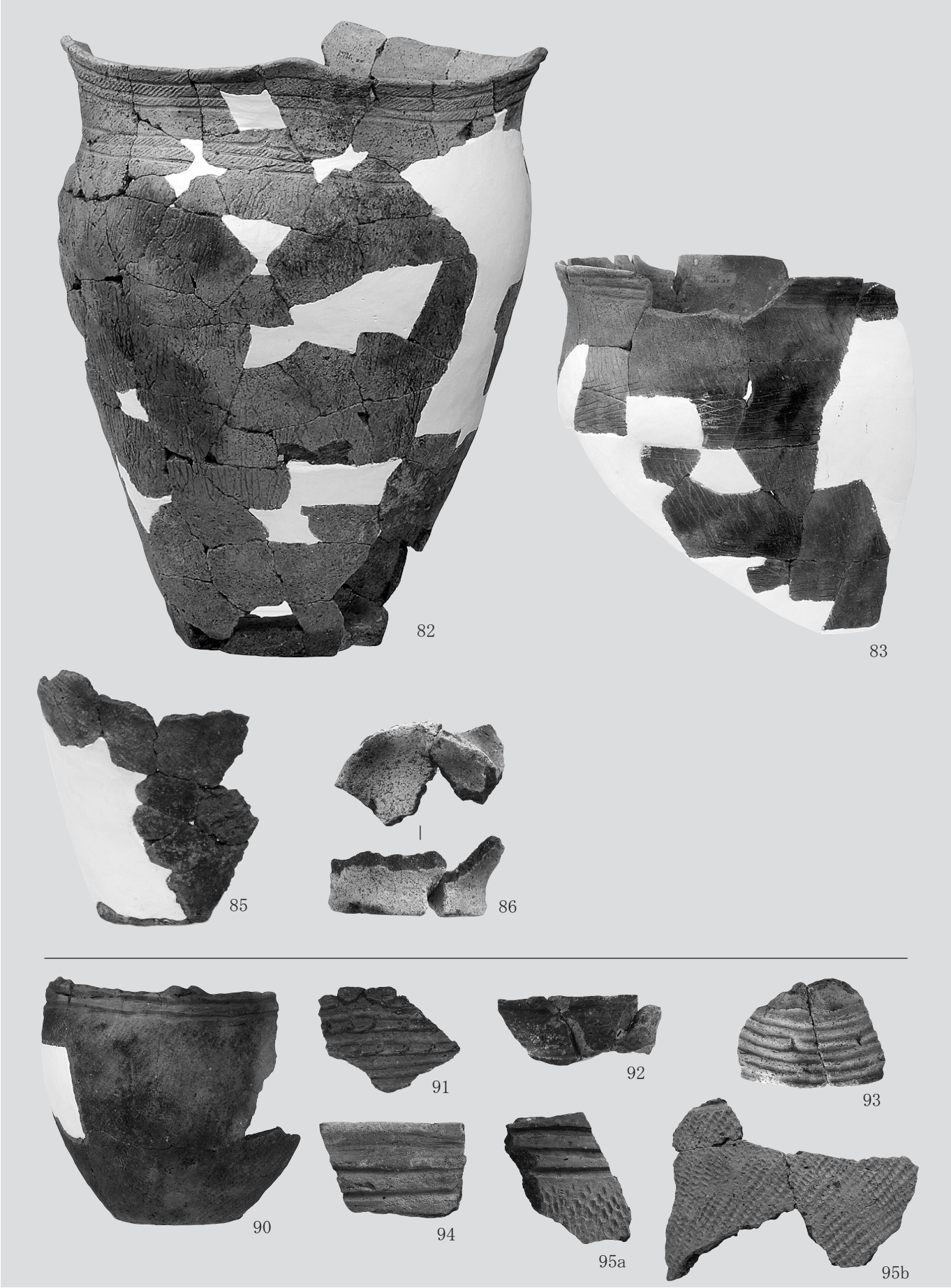
図版75

図版76

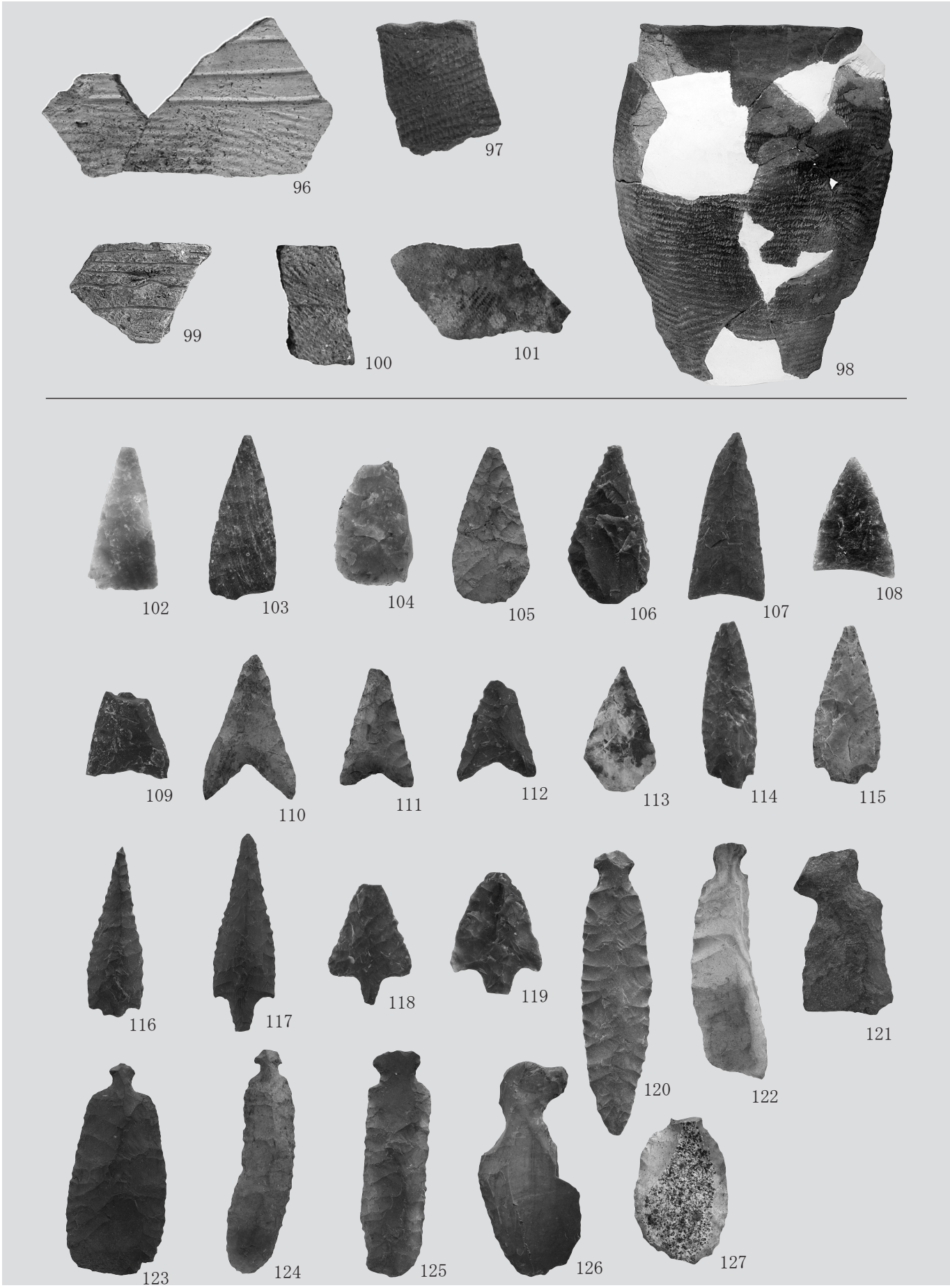
図版77



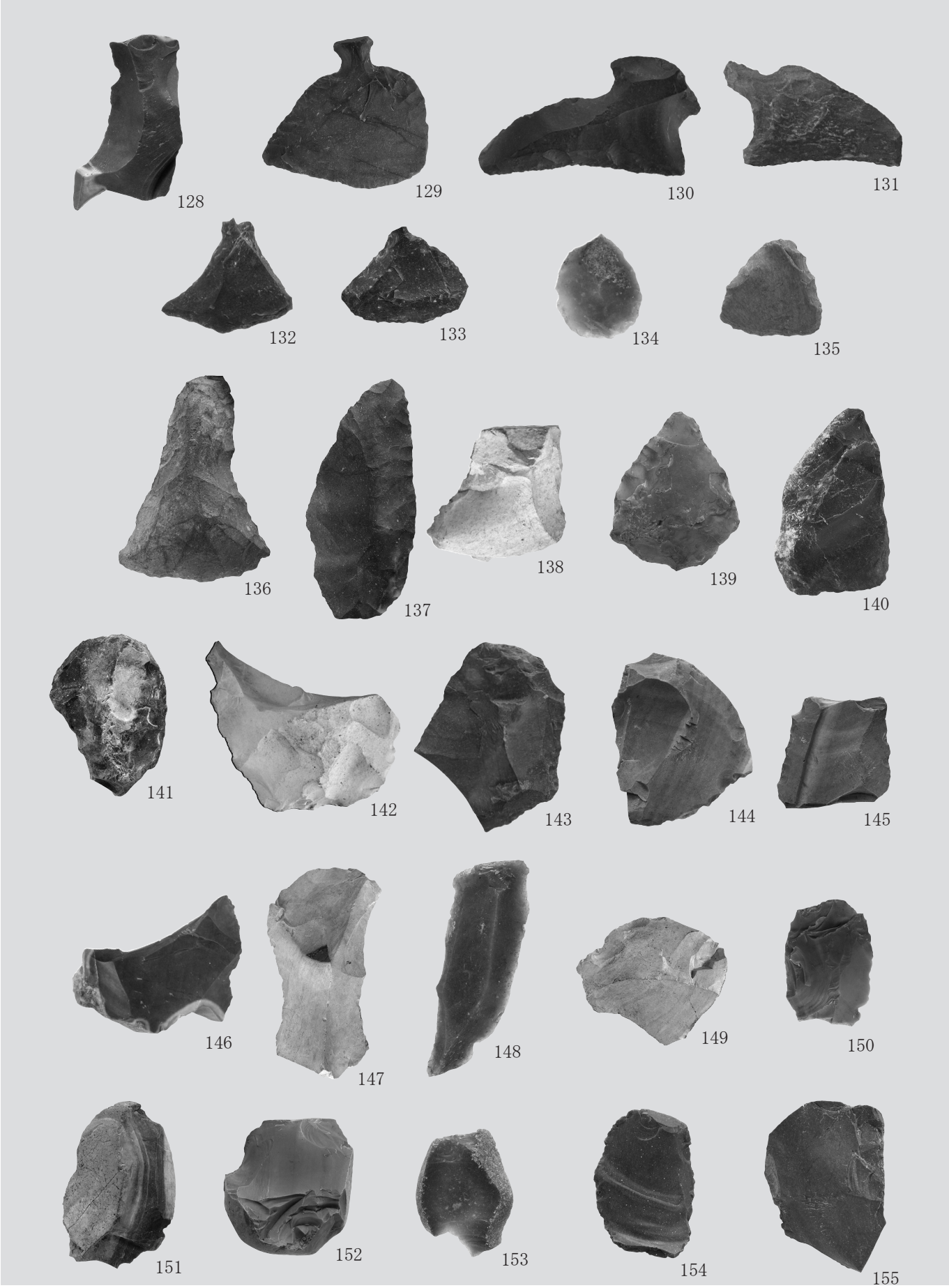
図版78



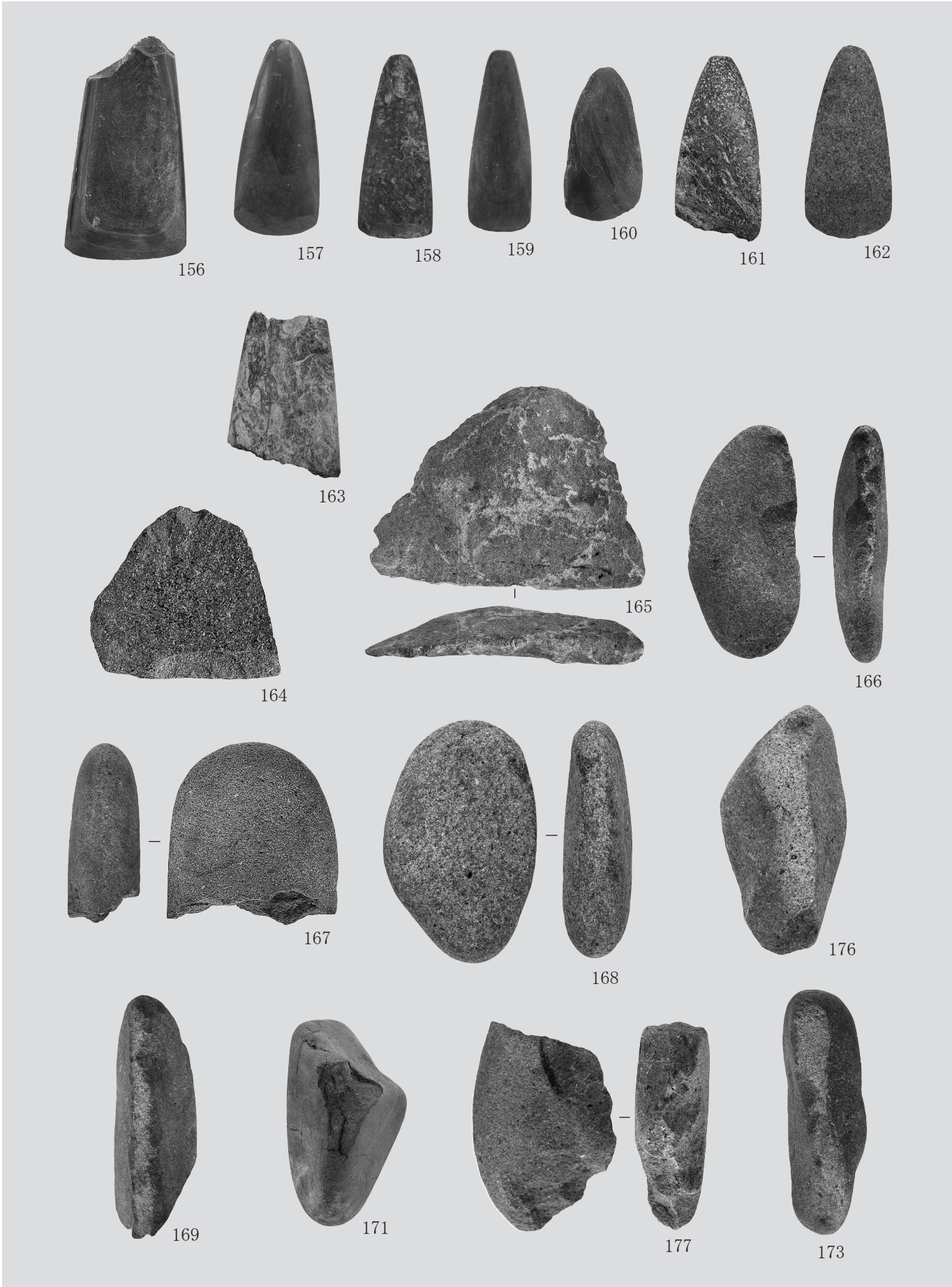
図版79


96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127

図版80


128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155

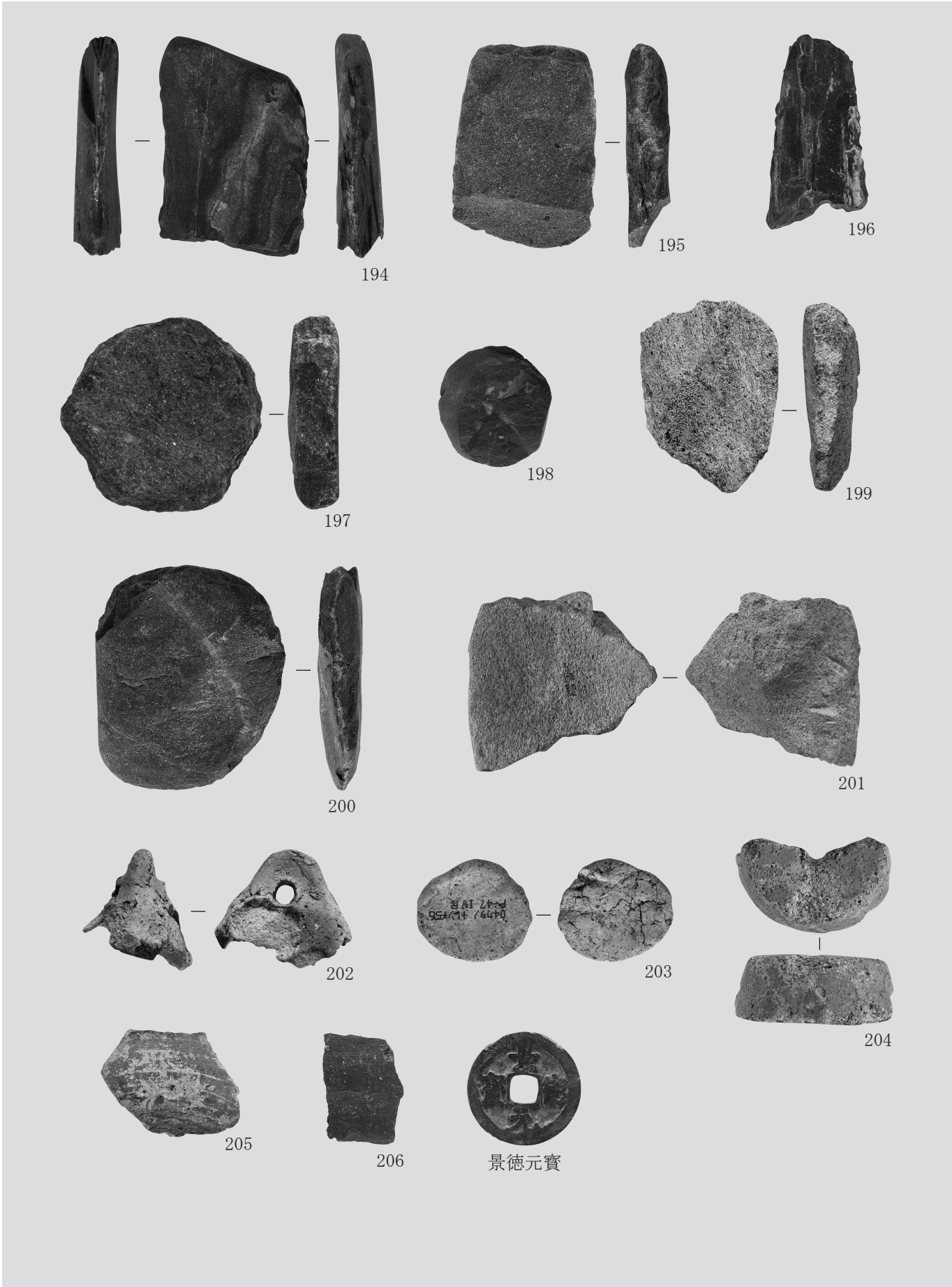
図版81


156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
176
169
171
177
173

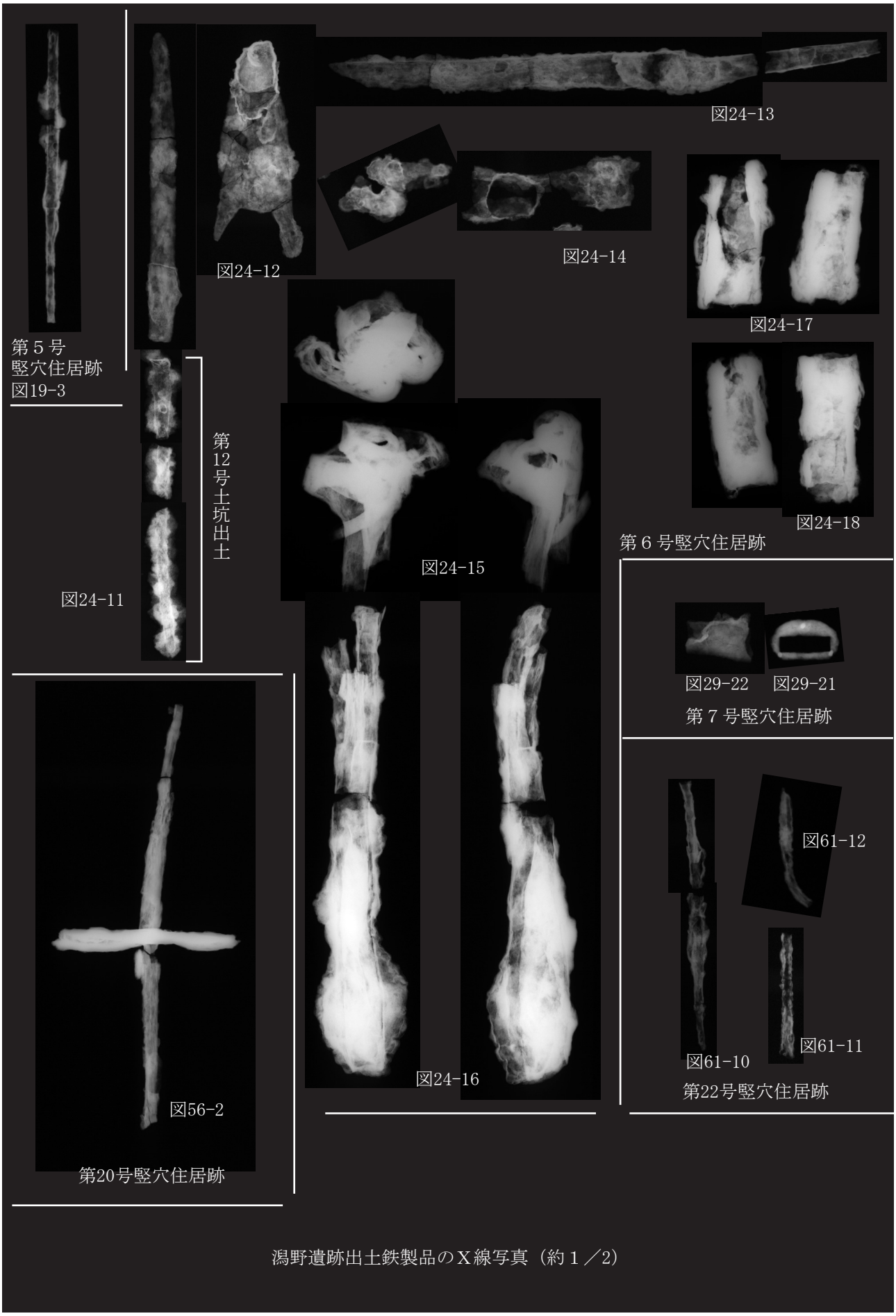
図版82

174
175
170
172
178
181
182
185
180
179
183
186
187
190
192
184
191
189
188
193

図版83



図版84

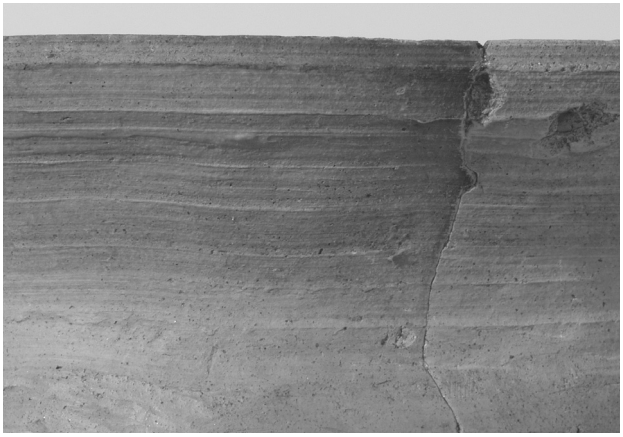


潟野遺跡出土鉄製品のＸ線写真（約１／2）

図版85

口縁部の横走沈線文（SI14 図47-9）

頚部の横走沈線文（SI14 図47-12）


細かい単位の頚部ヨコナデ（SI14 図46-７）

口縁部凹線状の段（SI15 図49-1）

細かいハケメ（SI1 図5-19）

粗いハケメ（SI13 図42-4）

条の広いハケメ（SI22 図61-7）

ハケメ→ミガキ（SI14 図42-4）

ケズリ→ミガキ（SI17 図28-1）

ミガキ（SI15 図49-1）

図版86

報告書抄録

ふりがな	かたのいせき
書名	潟野遺跡
副書名	八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第412集
編著者名	茅野嘉雄　岡本　洋　斉藤慶吏
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒038-0042　青森県青森市新城字天田内152-15　TEL 017-788-5701　Fax 017-788-5702
発行期間	青森県教育委員会
発行年月日	西暦2006年３月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	旧日本測地系（Tokyo Datum） 北緯	旧日本測地系（Tokyo Datum） 東経	日本測地系2000（JGD2000） 北緯	日本測地系2000（JGD2000） 東経	調査期間	調査面積	調査原因
潟野遺跡（かたのいせき）	八戸市（はちのへし）大字是川（おおあざこれかわ）字潟野地内（あざかたのちない）	02203	03242	40°28′33″	141°29′29″	40°28′43″	141°29′17″	20040420～20041020	11,500㎡	八戸南環状道路建設に伴う遺跡発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
潟野遺跡	集落跡	縄文時代早期中葉	竪穴住居１軒　土坑１基	縄文土器（吹切沢式、早稲田６類、円筒下層式、円筒上層式、最花式、十腰内１式、大洞式）・石器・土製品・石製品	縄文時代早期中葉の吹切沢式土器に、関東地方の子母口式の要素が加わった土器が第９号竪穴住居跡から出土しており、両者の関係を知る上で重要な資料となる。 奈良時代の第７号竪穴住居跡の堆積土中から銅製の銙帯金具が出土した。第15号竪穴住居跡出土の土師器坏底面には「#」の刻書がみられる。 平安時代の焼失家屋（第６号竪穴住居跡）から多量の住居構築材とともに、木製品やさまざまな種類の炭化種子が出土した。
		前期初頭以前	焼土遺構１基　石器埋納遺構１基　集石遺構１基		
		中期後半	竪穴住居１軒　土坑２基		
		後期前葉	竪穴住居３軒　土坑５基		
		後期	土坑９基		
		細別時期不明	土坑10基　焼土遺構３基		
	散布地	中期前半 晩期			
	散布地	弥生時代		弥生土器（砂沢式ほか）	
	集落跡	奈良時代	竪穴住居11軒　竪穴遺構２基　土坑２基	土師器・須恵器・砥石・軽石製品・鉄製品・銅製銙帯金具・土製品・木器・炭化種子・銭貨	
		平安時代	竪穴住居跡７軒　竪穴遺構３基　土坑２基　掘立柱建物跡１棟		
		時期不明	竪穴遺構２基　土坑８基　掘立柱建物跡６棟　道路跡２条		
	散布地				
	散布地	江戸時代～近代		陶磁器	

要約

新田川左岸の丘陵斜面に立地する本遺跡は、縄文時代早期から近代にかけての複合遺跡で、縄文時代早期中葉・中期後半・後期前葉・奈良時代・平安時代と断続的に集落が営まれている。縄文時代の集落跡は小規模であるが、早期中葉の第９号竪穴住居跡からは子母口式の要素が加わった吹切沢式土器が出土しており、編年研究の一助となる良好な資料が得られた。古代には奈良時代前半（７世紀末～８世紀前半）と、平安時代半ば（９世紀後半～10世紀前半）の２時期の遺構がみられ、集落の消長は八戸地域全体の集落数の増減と連動している。奈良時代の竪穴住居跡からは良好な一括資料が得られたほか、第７号竪穴住居跡からは銅製銙帯金具が出土している。平安時代の集落は、奈良時代の集落より斜面下方に営まれており、第６号竪穴住居跡からは多量の炭化材や炭化種子の出土をみた。

青森県埋蔵文化財調査報告書　第412集

潟　野　遺　跡

－八戸南環状道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告－

発行年月日　2006年３月29日
発　　行　青森県教育委員会
〒030-8540　青森市新町二丁目３-１
編　　集　青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042　青森市新城天田内152-15
TEL 017-788-5701　FAX 017-788-5702
印　　刷　株式会社　誠　工　社
〒030-0113　青森市第二問屋町三丁目３－18
TEL 017-729-1611　FAX 017-729-1188

体

第11節　八戸市潟野遺跡出土鋳帯金具の鉛同位対比測定結果

努

削除

~~吉田生物研究所、~~国立歴史民俗博物館　齋藤　務

1．はじめに

八戸市潟野遺跡から出土した青銅製の鋳帯金具について、鉛同位体比測定を行った。

2．分析方法

試　試　希

資料表面から錆を採取し分析用資料とした。資料から、高周波加熱分離法で鉛を単離して硝酸溶液とし、鉛200ng相当量の試料溶液を分取して、リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置（FinniganMAT262）を用いて、フィラメント湿度1200℃で鉛同位対比を測定した。

温　体

3．分析結果

体

表１に分析結果を示した。馬淵・平尾が弥生時代から平安時代までの多くの青銅器についてデータを蓄積した結果、その鉛同位対比の変遷は下記のようにグループ分けできることがわかっている（馬淵・平尾、1982、1987）。ここでも、これに準じてデータの表示および解析を行った。

表１　分析結果

資料名	分析番号	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	出土遺構
鋳帯金具	B7201	0.8476	2.0926	18.436	15.627	38.579	04 カタノ　SI-7 4b 層（イ区）

なお測定結果は207Pb/206Pb比と208Pb/206Pb比の関係（A式図）で表示した。

上付

図１は測定結果を、上記の領域範囲のうち、E、J、Kとともに表示したものである。

下

測定値は領域Ｊの中にあり日本産の原料であることを示している。またこれは皇朝十二銭など奈良～平安時代の青銅製品に頻出する値であり、齋藤ほか（2002）が設定した「グループＩ」（図１）の範囲に入っている。供給地として山口県の長登鉱山や蔵目喜鉱山が想定されている。

W：弥生時代に将来された前漢鏡が示す数値の領域。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。
E：後漢・三国時代の舶載鏡が示す数値の領域。古墳出土の青銅鏡の大部分はここに入る。
J：日本産の鉛鉱石の領域。日本産鉛は現在までのところ、飛鳥時代以降の資料にしか見出されていない。
K：多鈕細文鏡や細形銅剣など、弥生時代に将来された朝鮮半島系遺物が位置するライン。

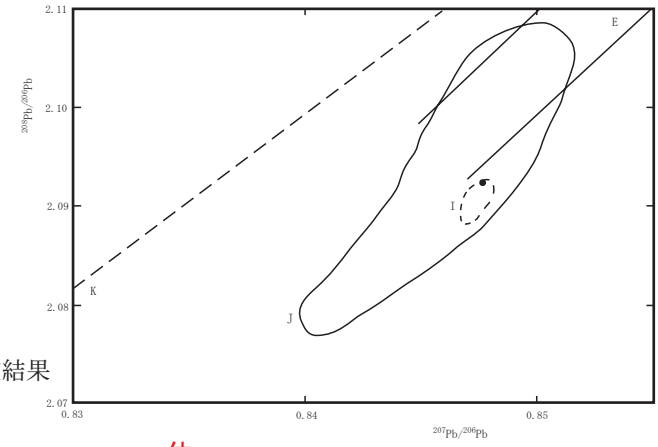


図１　潟野遺跡出土鋳帯金具の鉛同位体比測定結果

4．まとめ

体

八戸市潟野遺跡出土青銅製鋳帯金具について鉛同位対比を測定した結果、日本産の原料が使用されており、長登鉱山・蔵目喜鉱山が供給地として想定されている、古代の青銅製品に頻出する数値を示した。

参考文献

努

齋藤務、高橋照彦、西川裕一（2002）、「古代銭貨に関する理化学研究－「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析」、『IMES Discussion Paper』No.2002-J-30.

体

馬淵久夫、平尾良光（1982）、「鉛同位対比からみた銅鐸の原料」、『考古学雑誌』68（1）.

馬淵久夫、平尾良光（1987）、「東アジア鉛鉱石の鉛同位対比－青銅器との関連を中心に－」、『考古学雑誌』73（2）.

体

第11節　八戸市潟野遺跡出土銙帯金具の鉛同位体比測定結果

国立歴史民俗博物館　齋藤　努

1．はじめに

八戸市潟野遺跡から出土した青銅製の銙帯金具について、鉛同位体比測定を行った。

2．分析方法

資料表面から錆を採取し分析用試料とした。試料から、高周波加熱分離法で鉛を単離して希硝酸溶液とし、鉛200ng相当量の試料溶液を分取して、リン酸・シリカゲルとともにレニウム・シングル・フィラメント上に塗布した。表面電離型質量分析装置（Finnigan MAT 262）を用いて、フィラメント温度1200℃で鉛同位体比を測定した。

3．分析結果

表１に分析結果を示した。馬淵・平尾が弥生時代から平安時代までの多くの青銅器についてデータを蓄積した結果、その鉛同位体比の変遷は下記のようにグループ分けできることがわかっている（馬淵・平尾、1982、1987）。ここでも、これに準じてデータの表示および解析を行った。

表１　分析結果

資料名	分析番号	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	出土遺構
銙帯金具	B7201	0.8476	2.0926	18.436	15.627	38.579	04 カタノ　SI-7 4b 層（イ区）

なお測定結果は$^{207}Pb/^{206}Pb$比と$^{208}Pb/^{206}Pb$比の関係（A式図）で表示した。

図１は測定結果を、下記の領域範囲のうち、E、J、Kとともに表示したものである。

測定値は領域Ｊの中にあり日本産の原料であることを示している。またこれは皇朝十二銭など奈良～平安時代の青銅製品に頻出する値であり、齋藤ほか（2002）が設定した「グループＩ」（図１）の範囲に入っている。供給地として山口県の長登鉱山や蔵目喜鉱山が想定されている。

Ｗ：弥生時代に将来された前漢鏡が示す数値の領域。弥生時代の国産青銅器の多くがここに入る。
Ｅ：後漢・三国時代の舶載鏡が示す数値の領域。古墳出土の青銅鏡の大部分はここに入る。
Ｊ：日本産の鉛鉱石の領域。日本産鉛は現在までのところ、飛鳥時代以降の資料にしか見出されていない。
Ｋ：多鈕細文鏡や細形銅剣など、弥生時代に将来された朝鮮半島系遺物が位置するライン。

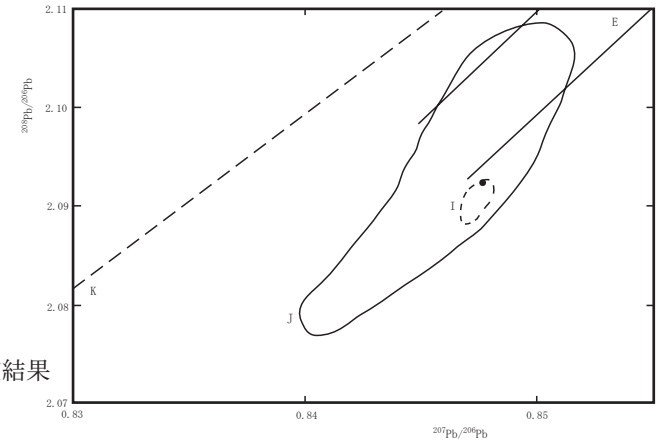


図１　潟野遺跡出土銙帯金具の鉛同位体比測定結果

4．まとめ

八戸市潟野遺跡出土青銅製銙帯金具について鉛同位体比を測定した結果、日本産の原料が使用されており、長登鉱山・蔵目喜鉱山が供給地として想定されている、古代の青銅製品に頻出する数値を示した。

参考文献

齋藤努、高橋照彦、西川裕一（2002）、「古代銭貨に関する理化学研究－「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析」、『IMES Discussion Paper』No.2002-J-30.

馬淵久夫、平尾良光（1982）、「鉛同位体比からみた銅鐸の原料」、『考古学雑誌』68（1）.

馬淵久夫、平尾良光（1987）、「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比－青銅器との関連を中心に－」、『考古学雑誌』73（2）.